

今年も暑い夏が予想されます。
美味しい高品質な米づくりのため高温障害対策を実施しましょう！

近年、異常な暑さによる、水稲の高温障害の発生が問題になっています。登熟期に高温が続くと稲は気孔を閉じてしまい、それに伴い蒸散不足や光合成の阻害などが生じます。すると、デンプン合成と糊への蓄積が不足しデンプンが蓄積されなかった部分が白く見える白未熟粒の発生に繋がります。



健全な米

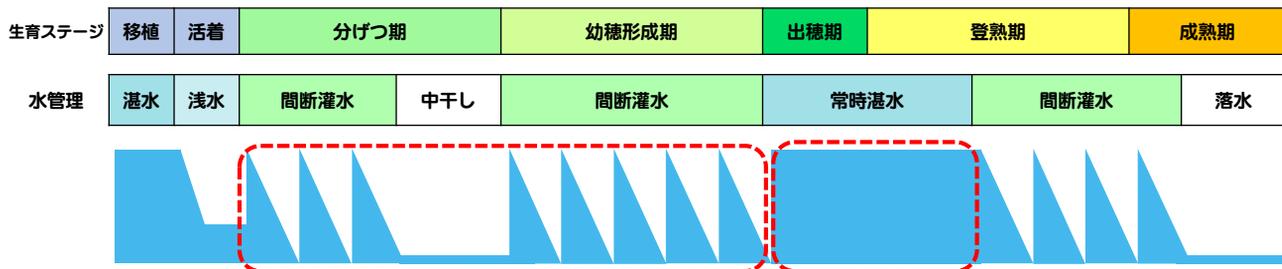


白未熟粒

高温障害対策のポイント

1 水田の水管理を徹底しましょう！

高温対策には、稲体の温度を低下させるためのこまめな水管理がポイントです。水管理で最も重要なことは、**水不足にしない**ことです。根から水を十分に吸収させ、蒸散を活性化し、稲体の温度上昇を軽減させましょう。



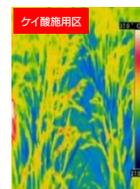
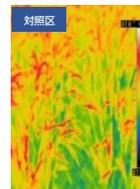
○中干し前後は、**間断灌水**により水と酸素を与え、根と幼穂形成の活性を促進させます。

間断灌水とは？：水尻を止め3cm程度の浅水状態に入水⇒自然に落水するのを待つ⇒再び入水 を繰り返します。入水するタイミングは自然落水して1~2日後の田面の土が乾き切る前です。乾かしすぎは逆効果になるので注意します。

○出穂後は、**稲の成熟にとって水が必要不可欠**です。田面が乾かないように登熟期前半までは湛水状態を保ち、登熟期後半は間断灌水を行いましょう。落水は、収穫7日前に行います。

2 ケイ酸資材を活用しましょう！

水稲の生育に必要なケイ酸には、根張りを活性化し蒸散を促進させ、高温時に稲体の温度上昇を軽減させる効果（クーラー効果）があります。しかし、にしみの管内の水田は、このケイ酸が不足する傾向にあります。ケイ酸入り資材（けい酸加里[®]アミ34など）を活用し高温障害対策をしましょう。



○けい酸加里[®]アミ34施用時期目安：田植え後30~45日 施用量：20kg~40kg（1~2袋）/10a

3 穂肥の施用をしましょう！

水稲の光合成力を高め高温障害に強くするとともに、生育後半まで稲体の活力を維持するためには、穂肥（特に窒素成分）の補給が重要です。分施肥の場合は、適期の穂肥を実施しましょう。

【水稲品種における追肥時期の葉色イメージ】

実際にご使用される場合は令和6年肥料農業予約注文書の裏表紙をご参照ください。

品種	参考：追肥時期
早生(コシヒカリ)	出穂16日前 葉色目安 3.0~4.0
中生(ほしじるし)	出穂22日前 葉色目安 3.5~4.5
晩生(ハツシモ)	出穂18日前 葉色目安 3.0~4.0



ご不明な点は最寄りの営農経済センターまでお問い合わせください